

都市-農村系の総合処方箋

ー人生の質を高めるオルタナティブな都市化ー

名古屋大学大学院環境学研究科 林 良嗣

名古屋大学大学院環境学研究科 高野 雅夫

名古屋大学大学院環境学研究科 黒田 由彦

An Integrated Prescription for Urban-Rural System: An Alternative Way of Urbanization to Enhance Quality of Life

Yoshitsugu HAYASHI, Masao TAKANO
and Yoshihiko KURODA

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

Abstract:

Integrated and holistic approach is necessary to diagnose and prescribe the issues of urbanization. QOL is one of the most important points of view for such an approach. To construct an urban region as a player of global economy as well as a center of localism of surrounding rural region may be an alternative way of urbanization to enhance QOL.

Keywords: *Urbanization, QOL, NGH*

1. はじめに

地域の持続可能性についての診断と処方箋の提示を行うにあたって、問題をもたらす個別の原因に対して個別の解決策を提示することが従来のやり方であった。これは医学になぞらえるならば、西洋医学的ア

プローチと言える。その治療は基本的には対症療法である。例えば、中国の都市では自家用車の利用が急速に拡大することによって、あるいは人々の食生活が牛肉を食するスタイルに変わるようになって、さまざまな環境問題を引き起こしている。それに対して、自家用車の利用をやめる、牛肉食をやめる、という処方がありうるけれども、それは現実には実効性がないと考えざるをえない。

都市化の問題を診断し処方提示するには、東洋医学的アプローチが必要である。東洋医学では、さまざまな要因のバランスが崩れたり循環が滞ったりする

著者連絡先 林 良嗣
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院環境学研究科
E-mail: yhayashi@genv.nagoya-u.ac.jp

ことを病気と診断し、それらを回復することをめざす。そのようなホリスティックで統合的なアプローチが都市化問題に対しても必要とされている。

2. QOL=人生の質を指標にした都市化の診断

私たちは、名古屋大学のグローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」において、2年間にわたって上海を中心に揚子江右岸、河南地方の都市および農村における都市化の現場を、さまざまな分野の博士課程の学生たちとともに訪問調査した。そこで目にしたのは、日本で言えば高度経済成長とバブル経済が同時にやってきたような、社会の急激で根本的な変化であった。上海を中心にした河南都市圏は、今やグローバル経済の拠点であり、上海はまさにグローバルシティである。

上海周辺の「純粋な」都市化の現場を目の当たりにして、私たちは、都市化とは、ひとつの地域がグローバル経済の枠組みの中に組み込まれていくことだ、という認識を持った。組み込まれるという意味は、グローバル経済の便利のために、土地利用が大規模に変化すること、人口が移動すること、さらに人々の価値観が変化することととらえることができるだろう。

その過程におけるさまざまな問題・課題を診断するにあたって、大切な視点は QOL であろう。QOL を日本語で生活の質と呼ばず、人生の質と呼んだのは、長野県阿智村の総合計画である。村では平成 20 年度からの総合計画で掲げる目標を、「住民一人ひとりが人生の質を高められる、持続可能な村づくり」としている。私たちは QOL を診断する具体的な指標化を進めてきた。その中で、教育機会、生活文化機会、アメニティ、安全安心、環境負荷性という五つの観点から指標化し、住民に対するアンケート調査を通じて QOL を数値化する試みをすすめている。さらに個人の QOL の一国における総和が NGH（国民総幸福）ととらえることができる。

都市化を QOL の観点でとらえるならば、農村での暮らしよりも都市での暮らしの方が QOL=人生の質が高いと圧倒的多数の住民が考える局面で、都市化が進むと言える。現在の中国はまさにこの局面である。

一方、日本は究極まで都市化が進んだ社会となった。最近の日本では、人口移動の逆流が起こり始めた。つまり特に若い世代が都市から農山村への移住をする例が全国で観察される。若い世代の移住者に話を聞くと、彼らにとっては、必要なものをすべてお金で買って暮らす都市での生活よりも、農地で食べ物をつくり、森林から水と燃料や木材を調達して暮らす農山村での生活の方が、収入は少なくなくても人生の質が高くなると感じているのである。

3. グローバリズムとローカリズム双方の拠点としての都市

都市化が進むと、都市における生活の QOL が低くなる局面がでてくる。グローバル経済はそれに参画する人々の人生の質をかならずしも高くしないということである。一方、農村では QOL の高い暮らしが保たれるものの、一般にグローバル経済に巻き込まれることによって地域は疲弊する QOL の高い地域を失うことは、GNH の観点から言って大きな損失と考えることができるだろう。

農村を疲弊させないようにしようとすれば、徹底したローカリズムの立場に立つほかはないだろう。農村内の需要を自分たちで満たす（外から買わない）とともに、周辺の都市部への食糧、木材、エネルギーの供給を担う、ということである。

これを都市の側から見れば、都市というのはほぼ定義によって、グローバリズムに組み込まれた存在である。一方、周辺の農山村とともにあるためには、都市は周辺地域のローカリズムの拠点でもなければならぬ。持続可能な都市を経済的な観点で考えれば、グローバリズムとローカリズムの絶妙なバランスを見出した都市ということではないだろうか。もちろん今日のグローバリズムは完膚無きまでにローカリズムを追放する力を持っている。したがって、都市はグローバリズムのプレーヤーでありながら、同時に周辺の地域をその暴力から守るバリアのような役割を果たす、ローカリズムの拠点であることが求められているのではないだろうか。